



滋賀大学

配布先：大津・彦根地区報道機関
報道関係者 各位

【発信元】：滋賀大学 広報課
〒522-8522 滋賀県彦根市馬場1-1-1
TEL 0749-27-7524 FAX 0749-27-1129
E-Mail koho@biwako.shiga-u.ac.jp

【滋賀大学×SDGs】

学生が企画から取材・制作まで担当 学内 SDGs 活動をまとめた映像・冊子を公開

2022年度秋学期に開講された授業「情報学への招待」(担当教員：中塚智子^{なかつかともこ})で、学生が本学のSDGsの取り組みを取材し、その内容をまとめたインタビュー映像や冊子を制作しました。この度、その成果を公開しましたのでお知らせいたします。

滋賀大学×SDGs 2022 動画

全体ダイジェスト：<https://youtu.be/islUs--TBWA>



各インタビューの動画等は以下の再生リストよりご覧いただけます。

https://youtube.com/playlist?list=PLnw1O_CiDqYEOCCax88IPGb0BtqjDjYv3



冊子は別冊をご覧ください。

これは、「情報学への招待」履修者の学生20名が6チームに分かれて、SDGsに関連する活動や研究を行っている人にインタビューを行った後、映像編集ソフトや画像編集ソフトを使ってデザインを行い、映像と冊子にまとめたものです。制作は本講義担当教員で映像作家としても活躍している中塚智子非常勤講師による監修・協力のもと、完成しました。

【リリースに関するお問い合わせ先】

滋賀大学 産学公連携推進機構 [担当：長尾]
彦根市馬場1丁目-1-1
TEL: 0749-27-1141
Mail: icr@shiga-u.ac.jp

SHIGA UNIVERSITY × SDGs ▶



p3-p4 金 秉基先生



p5-p6 サステナクローゼット



p7-p8 中村 卓先生



p9-p10 マスターネイチャー



p11-p12 松下 京平先生



p13-p14 もったいないパントリー



滋賀大学での SDGs の取り組みの一部を紹介します。

SDGs とは「Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）」の略称です。

SDGs は 2015 年 9 月の国連サミットで採択されたもので

国連加盟 193 か国が 2016 年から 2030 年の 15 年間で達成するために掲げた目標です。

滋賀大学の学生が大学の中にある SDGs に関連した活動や先生方に直接取材をし記事にまとめました。

掲載の所属・役職・取組みについては取材時点でのものです。



▶ 金先生の

SDGs活動

紹介メモ

KIM BYOUNGKI

金秉基 滋賀大学経済学部教授

主に貧困問題や発展途上国の経済発展などの研究を専門としている。自身も発展途上国に赴き、現地の現状をふまえて、どのような援助が必要かを日々研究している。主な活動として、現地の学校訪問、教科書の翻訳と提供、衣類などの支援などがある。最近では、自身が現地に赴くだけでなく、金ゼミのメンバーによる現地訪問が行われており、2022年9月には約3年ぶりにラオスの小学校と大学への訪問が開催されるなど、活動の輪が広がっている。他にも日本との関係良好化のための海外訪問なども行っている。

4 質の高い教育を
みんなに15 陸の豊かさも
守ろう

取材メモ

今回 SDGs の発信活動として取材させていただきました。最近では有名になった SDGs ですが、今実際に SDGs 達成のためにどのような活動が求められているのか、私たちにできることは何かなど、SDGs が身近であると実感し、取材後、SDGs の活動への参加へ関心がわきました。

SDGs は自分たちの生活とは無関係だと感じているそこのあなた！
ぜひこの記事に目を通してください。この記事を読む前と後ではあなたの SDGs への考え方が大きく変わるでしょう。SDGs 達成のために重要なことは一人一人の SDGs への関心です。今日から皆さんも他人事ではなく、自らも SDGs のためにできることを共に取り組んでいきましょう。



▲ラオスを訪問した際に
現地の学生に経済学を教えている金先生（中央）

制作：吉永 朱里



▲金先生がラオス大学に持参して複製した教科書（左）



▲ラオスの小学校におもちゃなどを寄付する当時のゼミ生（右）

高品質な教育を途上国に

SDGs 4番目の目標として掲げられている「質の高い教育をみんなに」。それを達成すべく尽力する金先生は自らの足で発展途上国であるラオスに赴き、様々な学校を訪問した。

当時教育指導ができる者が少なかった大学に行った際には、日本語や英語で書かれた教科書をラオスの言語に翻訳して製本した物を複数冊寄付。

小学校に行った際には、子供たちが学校を楽しめるように、子供たちに日本のことを好きになってもらえるように、という思いを込め、ゼミ生たちとともにおもちゃなどを寄付した。

少数民族の方々との交流

焼き畑農業を古くから行っている少数民族を訪問された金先生。人口の増加により本来よりも速いペースで焼き畑を行っているため、SDGs15番目「陸の豊かさも守ろう」の観点から砂漠化を懸念している。

調査と交流をかねて少数民族の住まう山奥へ向かった金先生は、そこで少数民族の様々な人と出会い、実際に彼らの生活に触れることでより深く現在起きている問題を知り、調査を進めた。

調査結果などを大学を通じて効果的に少数民族の方々に伝えることで問題の改善に取り組んでいる。



▲少数民族の住むところに自ら赴く金先生（左）



▲少数民族の方々との交流を楽しむ金先生（右）



インタビュー動画
こちらから視聴できます！



↑ 服飾業界の問題を知って欲しい! ↓

サステナクローゼット

紹介メモ

よしだ かなめ
吉田果南瞳さん

今回、取材をさせていただいたのは「サステナクローゼット」という活動をされている、滋賀大学データサイエンス学部1回生の吉田果南瞳さん。オーケストラ部に所属されています。

取材メモ

吉田さんとは初対面でしたが、私たちの取材に快く答えてくださいました。ありがとうございました。吉田さんの活動のもとになる社会に対する問題意識や、精力的に活動されている様子などをお聞きし、滋賀大にこのような高い志を持って活動されている方がいるのだと知り、驚きました。また、私たちの衣服の消費の仕方についても考え直さなければいけないと感じました。

SHIGA UNIVERSITY

11 住み続けられるまちづくりを



12 つくる責任 つかう責任



Kaname Yoshida

制作：西川 慧

実は成り行きと勢いで…

サステナウィーク（SDGsについて考え、持続可能な社会づくりを目指すために、学生や教職員が企画した講演会やワークショップなどのプログラムを約1週間にわたって行うイベント）の実行委員会の会議で何かひとつ企画のアイデアを出そうと思ったとき、「サステナクローゼット」の企画を上げたらそのままやってみようということで、勢いで始まりました。服飾業界における低賃金労働の問題や大量の廃棄の問題をみんなに知ってもらおうという背景のもと、この企画を思いつきました。「サステナクローゼット」により、問題を伝えるとともに問題解決への一歩を踏みました。



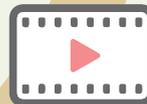
譲渡という選択肢

サステナクローゼットとは家の中にある「買ったけれど着なくなった服」や、「捨ててしまう予定の服」を集めて展示し、欲しいと思った人に譲渡する活動のことです。営利目的の「販売」ではなく問題解決の「譲渡」を行っています。大学の食堂前でチラシを配ったり、授業前に教室の学生に声をかけたりして積極的な広報を行い、その甲斐あって彦根キャンパス内だけでなく大津キャンパスの学生・職員からたくさんの服を送っていただきました。サステナウィーク当日は多くの学生や職員で賑わい、様々な服が譲渡されました。

これからの活動について

集まった服がレディース中心だったのに対し、実際にサステナクローゼットに訪れたのは男性の方が多かったため、寄付された服が想定よりも余ってしまいました。今後は寄付してもらう際に、より幅広い人に声をかけることで寄付する人と受け取る人との不均等をなくしていきたいです。

この活動を通して、衣服の製造に関わり、低賃金で働かされている人々がいることや、多くの廃棄が出てしまっていることを知ってもらいたいです。そして一人一人がそのような背景を理解して衣服と向き合っていくことが、衣服の廃棄を減らすことにつながると考えています。



インタビュー動画
こちらから視聴できます！



制作：磯野 悠音

▶ 中村先生のSDGs活動

紹介メモ

なかむら たかし
中村 卓 先生

長浜バイオ大学 バイオサイエンス学部 メディカルバイオサイエンス学科 准教授

京都大学大学院工学研究科博士課程修了。独立行政法人理化学研究所・国立環境研究所研究員、山田科学振興財団長期派遣援助研究員（チェコ・マサリク大学）を経て長浜バイオ大学へ。滋賀大学でも生命科学分野の講義「生命と物質」を担当なさっています。専門分野は生物有機化学、タンパク質工学。身の回りのいろいろな材料を使って有害な物質を除去・検出などの研究を進めています。

TAKASHI
NAKAMURA

取材メモ

中村先生は滋賀大学の先生ではありませんが、急な取材のお願いにも快く了承してくださいました。取材中、初めて耳にする用語もありましたが、我々が理解しやすいよう丁寧に説明していただき、スムーズに取材を進めることができました。取材を通して、普通なら廃棄されてしまう貝殻やもみ殻のような物でも、中村先生の研究では環境の浄化に役立つことや、失敗を恐れず研究を進めることで沢山の学びを得ることができる事を深く知りました。また、先生の研究が今後日本だけでなく世界中の劣悪な環境を改善する非常に有益なものであることも強く実感しました。ご協力ありがとうございました。



SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

すべての生き物が、住みよい環境を

中村先生が
現在取り組んでいる研究

身の回りの要らない材料を使って
有害な金属や医薬品を除去、検出する研究をしています。



川の中に含まれる医薬品の検出をする器具の開発

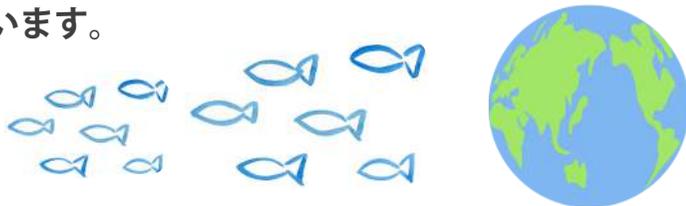
従来、毎回川の水を汲んで行っていた作業を簡略化。

環境中から重金属・有害金属を除去

普段なら廃棄されていた貝殻やもみ殻を使って鉛やカドミウムなどの公害の原因を吸着する材料の開発。

研究の先に目指すもの

大量消費社会と言われている現代ですが、不要な廃棄物がどんどん減って行って欲しいです。
また、発展途上国の廃棄物処理場のような劣悪な環境が私の研究を通して少しでも改善されればいいなと思っています。



みんなに伝えたいこと

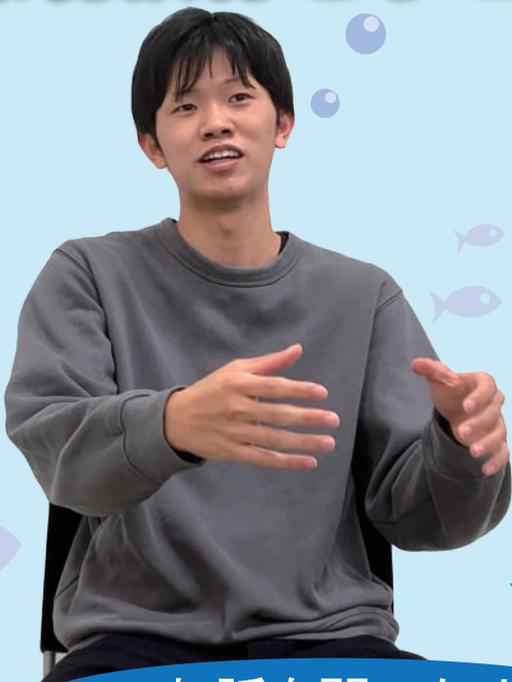
研究っていうのは失敗ばかりなんですよ。色んな事を試しながら何か発見していく過程があるので失敗を怖がらないでほしいんですよ。失敗することは恥ずかしいことじゃないし、むしろ失敗から学ぶことは非常に多いので、色んな事を失敗を恐れずに挑戦してほしいですね。



インタビュー動画
こちらから視聴できます！



▶ 環境教育を子どもたちへ



マスターネイチャーとは

当時経済学部2回生の渡辺太陽さんが立ち上げ、滋賀大学の彦根キャンパスを拠点に活動しているサークルです。代表の太陽さんが、通学路の琵琶湖湖岸の汚さに危機感を感じ、結成。琵琶湖で遊ぶことの楽しさを広めると同時に、環境について考えることをテーマに活動をしています。小学校低学年、幼稚園児向けに、彦根市を流れる芹川の「睨みの木伝説」と「河童伝説」を元にした『河童のニラミ』という紙芝居を作り、2021年の11月ごろから講演活動を行っています。

6 安全な水とトイレを世界中に



11 住み続けられるまちづくりを



12 つくる責任 つかう責任



14 海の豊かさを守る



お話を聞いた人

平下 怜良さん

愛知県出身。現在滋賀大学経済学部3回生で、ゼミナール協議会、文芸サークルなどの代表も務めている。2回生の夏から現在のマスターネイチャーの代表である渡辺太陽さんと共に、現在の紙芝居を使用した環境教育の形を作り上げた。講演活動では紙芝居を読んでおり、「紙芝居のお兄さん」として、子どもたちに愛されている。

取材後記

「環境のために、今日から私たちに出来ることはありますか」取材後に聞いてみた。「ゴミをゴミ箱に捨てること」。活動のコンセプトも子どもたちに伝えることも必ずシンプル。取材を通して、大人と同じ伝え方では小学校低学年や幼稚園児へは伝わらないメッセージがあることを再認識した。SDGsの理念に leave no one behind「誰一人取り残さない」がある。子供たちにも環境問題を考えてほしい、そして琵琶湖の美しさ、楽しさを知ってもらいたいという思いから試行錯誤する過程を垣間見ることが出来た。

琵琶湖

マスターネイチャーの具体的な取り組み

主にショッピングモールや学童（保育）で、小学校低学年や園児などの子供たちに向けて自分たちで作った紙芝居を披露しています。また紙芝居だけだとつまらないので、ダンスやクイズ大会なども一緒に行うことで楽しく環境について学ぶ、環境について考えるきっかけにする活動をしています。

紙芝居の様子



「河童のニラミ」誕生秘話

滋賀大学の寮の近くに「睨みの木」といういわくつきの木があって、またその近くにある「芹川」という川に河童がいるという伝説があったので、その二つを合わせて子供たちに伝えてあげたらおもしろいと思ったんです。そういった経緯で、睨みの木に住んでいて彦根の人たちを見守っているというポップな設定で、「カッパのニラミ」という作品・キャラクターを作りました。

紙芝居の内容

河童のニラミと琵琶湖の生物たちが一緒にゴミ問題を解決して行って、村びともそれに参加しはじめる。どんどんと大きくなった輪が琵琶湖を綺麗にしていく。こういった形でニラミが主人公になって、みんなに働きかけて琵琶湖をきれいにしていこうというストーリーになっています。



活動を始めたきっかけ

「琵琶湖の環境に対する危機感」を抱いている中

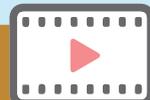
「環びわ湖大学・地域コンソーシアム」の支援があって活動を始めました。

現代表の渡辺太陽が琵琶湖の湖岸沿いが汚れている状況に悲しさを感じて、何かできることはないかなと考えていたのですが、そういった活動にはお金が必要です。そう悩んでいた時に滋賀県の大学や企業、公共団体が連携して支援金活動などを行っている環びわ湖大学・地域コンソーシアムを知りました。そこから援助頂いた資金で紙芝居を作ったのがきっかけです。



意識していること

- ① 琵琶湖を好きになってもらう
- ② 体当たりで接する
- ③ 伝えることはシンプルに



インタビュー動画
こちらから視聴できます！



制作：山本 大葵

▶ 松下先生のSDGs活動

紹介メモ

MATSUSHITA

KYOHEI

松下 京平 滋賀大学経済学部教授

1980年生まれ。京都大学農学部卒業後、京都大学農学研究科 食料・環境政策学にて修士課程、人間・環境学研究科、相関環境学専攻にて博士課程を修了し、現在滋賀大学経済学部の教授として勤務。

環境経済学、農業経済学を専門としている。また、2021年には滋賀大学環境総合研究センターのセンター長を務めた。

取材メモ

私たちは初めてのインタビューだったのですが、事前に行っていたメールでのやり取りから当日の段取りまで非常に丁寧に対応していただき、とてもスムーズに取材を進めることができました。

本来は3人でお話を伺う予定だったはずが当日2人での取材になってしまい一時はどうなることかと思いましたが、それも今ではいい思い出です。取材でのお話は私たち学生にとってとても新鮮で勉強になり、何より教授に聞きたいことを直接じっくり伺うことができるという貴重な経験になりました。

松下先生、大変忙しい中お時間いただき、本当にありがとうございました！



\\ 松下先生が //

現在取り組んでいる研究

農業問題で欠かせない食料と水、気候変動のもたらすシナジー効果の研究、または、これらの衝突がもたらす作用についての研究を進行中。



SDGs について

先生は SDGs の指標は不完全であると考えています。そもそも SDGs とは、よりよい世界の実現のためにやれることからやってみようというものですが、その指標を与えられたものとして受け取り、指標のみを追いかけて「SDGs に貢献しました」というのはいささか早計ではないかと考えておられます。例えば、水の効率性の項目（水 1 m³あたりに生み出される富の向上を目指す指標）では、水と生産性の関係しか測ることができず、農薬や化学肥料などを滝のように使って生産性を向上させても項目を達成することができます。松下先生はこのように SDGs の項目自体は達成することができても、SDGs 本来の目的は達成できないようなことでは意味がないのではと指摘されています。



一番伝えたいこと



我々は環境に対しての正しい理解と知識を有していないため

自らの首を絞める行為をしてしまうかもしれません。

先に述べたように、国連の考える SDGs の対策法ですらも問題点は多々あります。

故に、自然と経済、我々の生活の両輪を上手く回していくためにも、

一人一人が今ある政策に疑問点を持って、自問自答してほしいと考えています。



インタビュー動画
こちらから視聴できます！



▶ 食品ロスを活用する

「もったいない」を「ありがとう」へ

紹介メモ

もったいないパントリーって何？

もったいないパントリーとは、経済学部3回生の中井大翔さんが代表を務める研究会が実施する活動の一つで、地域の人々からロスになってしまう食品を頂いてそれを大学生に配布する活動です。主にフードバンクひこね等の地域の団体から提供されています。サステナウィークの期間になると大学の生協前で食品配布活動を行っており、3日間で学生と職員を合わせ150人程が、食品ロスになるはずだった野菜や食品を受け取りました。

13 気候変動に
具体的な対策を



12 つくる責任
つかう責任



もったいないパントリー



取材メモ

学生にできること

サステナビリティ研究会の代表という肩書を持ち大きな活動を行っている中井さんですが、話をするにつれ同じ大学生であるのだなと不思議な気持ちになりました。大きな活動をしている大学生も学生の域でできることから手を伸ばした結果今の活動があるのだと考え、同じ学生として自分も何かしたいという気持ちがあおられ、何かをやりこなす人は人を動かす力を持っているのだと感じました。サステナビリティとは何だかという考えてもみなかった質問をされ、答えられませんでした。考えるきっかけになり物事に対する自分なりの見解を持つことは大事であると思いました。



「フードバンクひこね」とは

フードバンクひこねは「もったいない」を「ありがとう」へをモットーに活動を行っている団体です。毎月第二・第四土曜日の午前
に食品の整理を、午後に食品の配布を彦根で行っています。運営はボランティアによって行われており、大学生のスタッフも多数参加
しています。フードバンクとは、ロスとなる食品の寄付をいただき必要としている方に届ける活動です。サスティナビリティ研究会はフー
ドバンクひこねのスタッフ体験も行っています。

活動の流れ



多くの人にフードパントリーの知識を

もったいないパントリーの目的は、食品ロスをなくすことです。しかし、実際にこの活動で食品ロスを軽減することができても「食品ロスをゼロにする」ことは厳しく現実的とはいえません。それでも活動を続けるのにはもう一つの目的があります。それは、多くの人に食品ロスの現状を知ってもらうこと。知ることは行動することの動機につながります。もったいないパントリーを通じて地域のフードパントリーやフードバンクを知ってもらう、それにより地域と学生が近づくことが活動する目的です。

サスティナビリティとは何だろう？

サスティナビリティとは持続可能性のことを指しますが、この答えは人それぞれだと中井さんは言います。そして中井さんのサスティナビリティとは、活動と想いの持続性です。中井さんがしている活動の中井さん自身がやり続けようという思いや、誰かほかの人が中井さんの活動を見て自分もやりたいなと思いついて参加していくことで、始まった活動が想いととも持続していく。自分の始める活動が持続させるものか、一回で終わってよいものなのかかなり考えるそうです。一度自分なりのサスティナビリティを考え、答えを持つのもよいかもしれません。



インタビュー動画こちらから視聴できます！





SHIGA UNIVERSITY × SDGs
<https://www.shiga-u.ac.jp/icr/sdgs>



彦根キャンパス（経済学部・データサイエンス学部）
〒522-8522 彦根市馬場一丁目 1-1 tel.0749-27-1141
大津キャンパス（教育学部）
〒520-0862 大津市二丁目 5-1 tel.077(537)7701



